

俳句雜誌

空

空

令和3年1月31日発行

第18巻6号

通巻第94号



2021・1

SORA 94号

三十五句(1)

柴田佐知子

水鳥に曳かれゆく水ありにけり

雪吊の仕上りし地がすこし浮く

鷹匠と同じ眼をして腕の鷹

やはらかき山裾を分け齒朶を刈る

楼門のゆるがぬ木組み年新た

金屏風据ゑて畏き間となりぬ

膝頭揃へ日本のお正月

日向より日向へ移る初雀

山河まだ明るき初湯浴びにけり

側近の悪が華やぐ初芝居

初髪に囲まれてゐる男かな

浜よりの砂浴ぶる松寒に入る

七種を矮鶏にも少し分ちけり

棒のごと海を出でくる寒稽古

審判の声底冷えの武道館

辺りより更に冷たき火事の跡

寒見舞灘の大きな魚さげて



福岡 高倉 和子

気に入らぬ顔して座る生身魂

病室の消灯のあと桃匂ふ

亡き父の帽子を被り案山子立つ

菊を焚くはじめは煙ばかりなり

神主の白の際立つ秋祭

秋祭揃ひてきたる鉦の音

足もとに猫の来てゐる月見かな

稜線に重ねて柿を干してをり

東京 中田みなみ

雁木町行けど洩れくる声もなし

蜂の巣をかかげ山家の枯れ深し

かまど猫叱りし頃の鍋と釜

炬燵よりインコに話す老夫婦

夜咄や風の出てくる泣きどころ

夜咄や落ちに気づかぬ純情派

冬深し湯屋の隣りに生薬屋

吠えもせず犬すれ違ふ枯野かな

長崎 荒井千佐代

濡れ縁にはほとの日々や秋茄子

貝殻を踏み来る音や後の月

三つまで虫の名わかる虫の闇

エプロンのフリル豊かに林檎剥く

草の花許すといふは忘るること

松手入れ昼餉は松の根にかけて

尻尾まだ動いてをりぬ鴟の糞

夜は肩の力を抜いて案山子翁

埼玉 服部 早苗

夕風や被爆はまゆふ白極め

モーターの唸りはげしく草を刈る

ドローンに視る夏果ての爆心地

螻蛄鳴くや地下に神殿放水路

地下列柱じつとり濡るる厄日かな

台風来木つ端のごとき経験値

QRコード撮る音涼新た

秋声やわれより若く師の逝かれ

北九州 深川淑枝

紺深き潮路やのちのころもがへ

稲の香や荒磯の宮を遠拝み

水積んで出る船帰燕高かりき

のちの藪入りや海女径細りたる

流木となり果てし船銀河濃し

目の粗き櫛使ひみて涼新た

秋潮の寄す撥擦れの琵琶の胴

笛一管須磨にのこしぬ望の月

広島 戸栗末廣

けふ処暑の蹠に崩る川の砂

送り火や水辺のやうな雲浮び

醜草の中に一本月見草

銀漢やおふくろといふ小料理店

ひとところ破れて秋の蜘蛛の網

秋風や故なく挟む体温計

いつせいに逃ぐる愉しさ稲雀

切り取りしばかりの角のひんやりと

福岡 角野良生

噴水の天辺水の混み合へり

大向日葵に金剛の首と茎

校長に似し学校田の案山子

半ば巻き秋の簾となりにけり

賑やかに仏乗り合ふお精霊船

無月なり百万都市の街明かり

霧を出て霧に入りゆく歩荷かな

萩・芒良寛の書もそよぐなり



千葉 原 友 子

草の実や艇庫のペンキまだ匂ひ
 間引菜の土澄んでゐる洗ひ桶
 青簾水の底ひのごと住める
 岩塩のうす紅碎き夏料理
 標本に垂直のピン夏果つる

北九州 河 原 敬 子

村はみな同じ仏徒や夕焼雲
 気の毒なほど痩せてゐる案山子かな
 朝の日がまつすぐ墳へ秋まつり
 一山に千の石仏鳥渡る
 鰯雲奈良の駅名芳しき

直方 曾 根 富 久 恵

新涼や染料にする花を摘む
 布染めて二百二十日の風に干す
 切り花についできたりし秋の蟻
 台風来大事なもの風呂敷に
 柿の木は裏年吾は古稀を過ぐ

大野城 森 田 明 成

家事百般倦まず弛まず秋に入る
 まもり来し家紋華やぐ軒灯籠
 銀漢や雑魚寝の難き歳となる
 修理屋の少なくなりぬ秋の風
 行く程に秋色ふかき故郷かな

直方 石 橋 幾 代

種を採る指先さらに細くして
 にはとりの喧嘩どちらも羽抜鶏
 踊の輪炭坑節にふくらめり
 仏より高し柵田の曼珠沙華
 母が乗るふつくらとした茄子の馬

太宰府 山 本 則 男

年の眼に拵がつてゐる鰯雲
 落城のままの石垣曼珠沙華
 人間の丸くなりゆくところろ汁
 熟柿落つほとりは鶏の放し飼ひ
 遊びたき風の集まる猫じやらし

須 恵 苑 実 耶

峠越え霧に沈みしふるさとへ
 臥す父の五分粥に割る寒卵
 歳晩の看取り足撫で手を包み
 喪の家の撒き餌に雀石露の花
 考は妣を見つけたらうか春時雨

長 崎 松 尾 龍 之 介

端居して脛の古傷さすりけり
 ベランダに凭れそのまま召されしと
 原子野に匍匐してゐる南瓜かな
 秋出水苔一塊を流しけり
 風白し山に拾へる海の貝

福岡 秋津 令

網戸より声かけてゐる自治会長
彫り上げし仏の笑みや秋高し
正気かと思ふ声あげ猪走る
菊人形首なきままに運ばるる
さつきから見得の決まらぬ村芝居

岡垣 田中とし江

松の木の脂噴きあがる土用かな
秋潮の上へ跳ねたる子馬かな
野分だつ板戸に囲ふ恵比須様
風折れの枝の匂ひや野分晴
岩かげに頭だけ入れ鯨かな

福岡 栗原京子

大夕焼次も地球に生まれたし
清流に刃一突き水眼鏡
名刀の鞘に猫描く一位の実
霊媒の声めく鼯熱帯夜
逃ぐる魚岩陰に追ふ水眼鏡

粕屋 吉田 葎

寒垢離の声を何度もしぼり出す
雪女山門くぐり逢ひに来る
濾過されし光の溜まる冬座敷
人はむかし鳥かも知れず日向ぼこ
すべらせて反物拵ぐ春隣

宮崎 田代民子

境内に棲みつきし鶏桐一葉
雲ゆきの怪しくなりぬ穴まどひ
夏負けに効きさう烏骨鶏のたまご
籠り居や釣瓶落としの厨ごと
吹いて消すカレーの辛さ夏終る

福岡 山内 碧

力尽きし重さに浜の水くらげ
竹林の取れ立ての風夕端居
小鳥屋の奥の暗さや秋暑し
小波の豊かな湖や秋立ちぬ
月光を浴びて身体の透けてゆく

粕谷 秋 千晴

蜘蛛が罟を張るだけ張つて消えにけり
蜘蛛の糸弾けば空の鳴りにけり
続き間にテーブルを足す盆三日
和太鼓に体轟く秋日和
薄目して潜む黒猫一葉落つ

北九州 横田 敬子

稲熱病調査済との札が立つ
人も稲も疫病みに耐ふるこの世かな
手のひらで量りし梨の重さかな
水替へて仏花生き生き今朝の秋
不揃ひの団子供ふる秋彼岸

糸島 小林 朱夏

玄界の入り日に応ふる金木屋
豊年や風に向ひてペダル踏む
月光にさらされてゐる無人駅
七五三鳩を蹴散らす神の前
年新た波に委ぬる入日かな

兵庫 林 徹也

加西市鶴野飛行場址四句
秋の田やひと筋特攻滑走路
機銃座の址点々と大花野
コスモスの風や防空壕の口
祈念碑に背筋を正す生身魂
先導は卒寿茸の山に入る

福岡 永淵 恵子

胎の子を支へ茅の輪をくぐりけり
初めよりライバルめだか生まれけり
采配の弓張高く祇園山車
大鵬の手形くつきり夏座敷
鳴きながら蝉の飛びたつ雨後の空

熊本 松田 明子

顔を笠に隠して踊りきる
摺り足の男踊りの腰落とし
喝采や小兵鬘肩の草相撲
神社より懸賞の出る宮相撲
病弱の母乗せて来し茄子の馬

福岡 三井所美智子

栗拾ふ痩せ地の山を相続し
潮風の城址わが世とぼつた跳ぶ
石蹴りに夢中な頃の赤とんぼ
クレーンに鉄ぶらさがる残暑かな
紅葉谷夜は獣の目の数多

大阪 井上 和子

背表紙のいつ剥がれしや屋祭り
篋の井戸冷えびえと魂祭り
老木の風の涼しき閻魔堂
滴りや祠に燐寸散らばりて
蒼天や轍に溜ぶる飛蝗の死

神奈川 窪 みち子

迎火焚くドアの把手も拭き浄め
踊唄辻にやさしき風の渦
朽ちかけし小屋の形に葛かつら
コスモスに子はひらひらと消えにけり
葡萄棚洩るる日が揺れ香を揺らす

兵庫 青木 朋子

銀の玉のせて青田のしづまれり
ザリガニを捕らむと子らの寄る頭
今触れし草の隣に山棟やまかかし蛇
百合化して蝶になりたる墓前かな
級長のごとく向日葵立つ花壇